

国際交流の場，英語教育センター

— 留学生との交流を通して —

樟蔭学園英語教育センターコーディネーター 山岡賢三

1. はじめに

文部科学省は「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策⁽¹⁾」において、「様々な分野で英語力が求められる時代，英語はグローバル社会を生きる我が国の子どもたちの可能性を大きく広げる重要なツールであり，日本の国際競争力を高めていく上で重要な要素である。英語力の向上は教育界のみならず産業界など様々な分野に共通する重要課題である」と英語力向上の重要性を述べている。また，求められる英語能力として，「異なる国や文化の人々と英語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることができる能力，つまり，臆せず積極的にコミュニケーションをとろうとする態度，相手の意図や考えを的確に理解し，論理的に説明したり，反論・説得したりできる能力など」としている。英語教育センター（以下，ELTC）では，このことを踏まえ，設立以来，施設の充実を図り，様々な事業を起してきた。例えば，異なる国や文化の人々と英語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることをめざし，英語ネイティブスピーカーと会話する Free Talk Time や様々な国のゲストスピーカーを迎え各国の文化や歴史を学ぶ English Salon，樟蔭学園で学ぶ留学生との交流の場を提供してきた。今回は留学生との交流について，その経過と成果について報告する。

2. AFS (American Field Service) 留学生との交流

2.1 AFS留学生受け入れのきっかけ

AFSは世界50ヶ国以上で，留学生が異なる文化を体験するプログラムで，樟蔭高校のAFS留学生受け入れは1970年から40年以上続いている。1970年頃に留学生を受け入れている学校も珍しく，先駆者としての樟蔭学園は他校から羨望の眼で見られていたであろう。2010年度までは，高等学校英語科教員が留学生担当となり，他の職務の傍ら留学生の世話をしていた。交流が盛んな頃は，年間2・3名の留学生を受け入れ，ホストファ

ミリーを希望する家族も断らなければならないほど多くの応募があったと聞く。

しかし、2010年頃にはこの行事もマンネリ化し、一部の先生や生徒にしか留学生の存在も知れず、ホストファミリーを探すのも難儀していた。そんな折、2010度の留学生が来日して1ヶ月ほどで帰国してしまった。その理由として、多分に留学生の性格によるものもあったが、一人の教師が留学生の担当をすべて任されていたので、その担当教師が多忙で留学生に十分かまえなかった、その教師と留学生の折が合わなかった、他に相談相手がいなかった、担任やクラスメイトは英語での意思疎通ができなかった、クラスメイト以外の友達ができにくかったなどが考えられた。

そこで、当時の副校長とELTCコーディネーターが相談し、2011年度からはELTCが留学生を引き受けることとなった。ELTCには英語で意思疎通できる者が複数いる、留学経験のあるスタッフがメンタルな相談もできる、ELTCに来る学生や生徒が留学生と英語で交流できるというメリットがあった。高校の行事日程や日々の連絡が滞るのではないかという心配もあったが、高校との連絡を密にすることで補うことにした。

2.2 2011年度留学生

東日本大震災の影響で来日が延期になっていた留学生が2学期から樟蔭にやって来た。オーストラリア出身の18才、Gabby。全校集会でGabbyを紹介し、ELTCニュースで「留学生だより」（その後、ほぼ1ヶ月1回のペースで発行され、留学生の学校生活を紹介している）を作り、全校生徒に留学生の存在を周知した。留学生はELTCを拠点として学校生活を送るようにし、どの生徒もELTCに来れば留学生に会えるようになった。また、日常的に留学生が身近に感じられるように、木曜の放課後、“Gabby’s Corner”と称し、樟蔭生との交流の場を設けた。11月には他校に通っているAFS大阪東支部の留学生を交え「留学生との交流会」を催した。この会は毎年1回開催で現在も続いている。本学の学生がチューターとして毎週2時間留学生の日本語指導にあたった。この取り組みも学生のキャリアアップとして現在も継続している。他、コーディネーターとの交換日記を通して、日本語の指導や悩み相談なども行った。

「毎日ELTCに行きました。先生とShoinの大学生は私の日本語勉強ので

つだいをしてくれました。毎週木曜日は“Gabby’s Corner”がありました。私と Shoin 生と一緒に英語と日本語を話しました。皆の英語が上手になりました」という Gabby の言葉が示すように、ELTCが留学生と学生・生徒を結びつける交流の場となっていた。

2.3 2012年度留学生

1学期から来日する予定になっていた留学生のキャンセルがあり、2学期から別の留学生が来ることになった。フィリピン出身の17才、Mae。Maeは元々日本のアニメに興味があり、来日前から日本語を熱心に勉強していた。留学生と樟蔭生が交流する“Mae’s Corner”では、英語を習い始めた中学生がMaeと1時間以上も知っている限りの英語を使って、アニメの話で盛り上がる場面があった。

Maeがお別れのスピーチで、「英語なしでアニメがみたい、漫画をみたい、これが日本語を勉強する理由です。・・・大阪弁が話せるようになった。初めて雪を見た。スキーにも挑戦できた。・・・この経験が、漫画でいう悟空が集めたドラゴンボールやルフィが探し求めているワンピースよりももっと大切なものであることを知っています」と述べているように、樟蔭でたくさんよい思い出を作ったようだ。特に、受け入れた当時2年生春組（児童教育コース）がMaeを暖かく迎え入れ、学校生活に馴染めるよう様々な工夫をしてくれた。Maeは元クラスメイトと今でもFacebookなどを通じ頻繁に交流があると聞いている。

2.4 2013年度留学生

この年は4月から、フランスからIwane（17才）を迎えた。Iwaneは日本語学習の経験は全くなく、英語も不十分なため、当初、担当者としても意思疎通に苦労した。本人は明るく前向きに日本の生活に慣れようと努力していたが、来日2ヶ月ほど経ってホームシックになった。コーディネーターとの交換日記を通して、いち早く彼女の心情を汲み取り、カウンセリングに役立てることができた。ELTCに所属する英語ネイティブ講師の中でフランス語が堪能な者に彼女の気持ちを聞いてもらったりして、危機を乗り越えた。修学旅行や運動会など様々な学校行事に参加する中で、学校生活にも慣れ、半年ほどでたどたどしいながらも日本語を話すようになった。

Iwane は、「月曜と水曜はスキー部，火曜日は放送部，木曜日はELTCでみんなと話します。金曜日は新体操部で体操をします。・・・もっとたくさんの人と話したいです。樟蔭での学校生活が大好きです」と10月の自治会総会でのスピーチで語っている。ELTCの“Iwane’s Corner”では，ペタンク（フランス発祥の球技）やジュ デ マア（フランスの伝統的な手遊び）を，実践を交え英語で紹介してくれた。

2.5 1978年度留学生，34年ぶりに同級生と再会

2012年4月10日に，1978年にAFSの留学生として樟蔭高校に通っていたアメリカ人の Kristen さんが母校・樟蔭を訪問し，現役の生徒の前で，その当時の先生や同級生と34年ぶりの感動的な再会を果たした。Kristen さんが樟蔭高校全生徒の前で行ったスピーチは，「当時私は，言葉も通じない，右も左もわからない異国の地でたったひとり，ホームシックになり，毎日泣いていました。そんな私にホストファミリーや同級生がやさしく接してくれました。おかげで私はその困難を乗り越えることができました。17才という多感な年齢のときに過ごした日本での経験は一生の思い出となりました」というような内容だった。スピーチの最後に，「みなさんは今英語を勉強していますね。英語を含め言葉は他の国の心を理解するための道具です。みなさんがいつか外国を旅行し，その国の美しい観光地を訪れるだけでなく，言葉という道具を使って，その国の人々と接し文化的独自性に触れる機会を持たれることをお勧めします」というメッセージを残してくれた。この言葉はまさに，「異なる国や文化の人々と英語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ること」に繋がる。Kristen さんの訪問は，その強烈な印象とともに，生徒たちに，国際共通語としての英語を学習する重要性を考えさせるのに，とても有意義であった。

3. 大学国費留学生との交流

3.1 2012年来日留学生

2012年10月から13年9月まで，2名の留学生が本大学で日本語を学んでいた。その内の英語の堪能な学生に，2013年4月からELTCでの学生・生徒の英語学習支援の学生アルバイトとして雇った。スロベニア出身の24才，Polona。Polona は非常に優秀な学生（TOEIC 満点の990点，日

本語検定1級取得)で、Free Talk Time の話し相手、English Salon でのスピーカー、英検受験者の面接指導、Kids English の指導補助、English Camp の事前指導と当日のインストラクターなど様々なELTCの業務に積極的に関わった。English Salon のプレゼンテーションでは自国の写真をたくさん使い、スロベニアの風土や食べ物、文化などを紹介した。English Camp では小豆島の3日間のキャンプに高校生と一緒に参加し、寝食を共にした。このような行事を通して、中高大学生とも深い交流をすることができた。

3.2 2013年来日留学生

2013年10月からは、ベルギー人の Carmen とグルジア人の Nino、二人の大学留学生を学生アルバイトとして雇っている。二人とも英語力はネイティブに近い。木曜日放課後の高校生のための Free Talk Time だけでなく、大学生が弁当を食べながら、気軽にチャットを楽しんでもらえるよう、Lunch Time Free Talk を始めた。この取り組みが大学生には殊のほか人気があり、毎回参加するレギュラーメンバーも徐々に増えている。毎回他愛のない話で盛り上がり、英語と笑え声が飛び交っている。現在、火曜日と木曜日の昼休みだけだが、希望者が増えれば月曜日から金曜日毎日に昼休みに開催することを考えている。また、留学生の二人には English Salon でベルギーやグルジアのことを話してもらう予定である。

4. 留学生との ‘Give & Take’

高校の留学生には、PTAから資金面でかなりの支援をいただいている。例えば、修学旅行・高原学舎・スキー合宿などの旅費、学費、制服・学用品購入費、定期代、お茶やお花の材料費など、学校生活に必要な様々な経費である。AFSの留学生を受け入れている公立高校などは、学費以外のほとんどが留学生の自己負担となっていることを考えると、樟蔭高校の留学生への支援は群を抜いている。

ELTCで留学生を受け入れる以前は、学校から留学生への一方的な ‘Give’ で終わっていたが、留学生をELTCの行事に巻き込み、生徒との交流をたくさん企画し、それをホームページなどで発信することにより、国際交流を推進する学校として、大いに宣伝することになる。つまり、この宣伝効果こそが学校側の ‘Take’ である。

大学国費留学生にとっても、ELTCで学生バイトをすることにより、少しでも経済面で助かると同時に、本学の学生・生徒にとっては、英会話をするチャンスが増えるという‘Give & Take’が成り立つ。このような‘Give & Take’をコーディネートすることがELTCの役目でもある。

5. 異なる国や文化の人々と英語をツールとしてコミュニケーションする場

2010年度、英語教育センターには、火曜日の放課後のFree Talk Timeに外部委託業者から派遣されたオーストラリア人の女性が一人いただけだったが、2013年度は、高校の授業を受け持つアメリカ、イギリス、カナダ出身のネイティブ講師が4人、月曜日から金曜日の放課後のFree Talk Timeを受け持つカナダ、イギリス出身のネイティブ講師2人、そして、フランス人の高校留学生とベルギー人、グルジア人の大学留学生と、ELTCも随分国際色豊かになった。樟蔭の学生や生徒が英語教育センターへ来れば、異なる国や文化の人々と英語をツールとしてコミュニケーションする機会がいっぱいある。

前述したAFS大阪東支部の留学生と交流する「留学生との交流会」は2011年度から続いて今年度で3回目となるが、2回目からは生徒が交流会の内容を企画し、司会進行から催し物まですべて生徒が運営している。ELTCで英会話の訓練を受け、東大阪菊水ライオンズクラブからフィンランドに派遣された生徒が、毎回英語で司会を担当している。留学生と楽しく交流している先輩の姿や流暢に英語を話す留学体験者を見て、後輩が大いに刺激を受ける会でもある。

また、2013年1月には、大学生が主催する留学生との交流会を開催した。YMCA日本語学校で学ぶアジアの留学生を招き、アジア各国の留学生との交流を通して、様々な国の人々が話す英語を聞くことができた。そのことによって、英語は国際的な場面で使うコミュニケーションのツールであると実感できたことは意味深かった。

2014年1月には、本学に在籍する留学生や他大学の留学生、YMCA日本語学校の留学生を招いて、昨年と同様の国際交流会を開いた。本学の学生と留学生が企画の段階から案を練り、当日の交流会ではゲームなどで大いに盛り上がった。国際英語学科の学生だけではなく、国文、児童、被服、ライフプランニングなどの他学科の学生も参加し交流の輪が広がった。

6. まとめ

加藤は、「優れた国際理解教育は、その学習する内容においてリレバンス(関連性)を持っている。リレバンスとは、自己と世界との関わりの様式において、その形ではなく、内容において妥当性そして実効性を持っているということである⁽²⁾」と述べている。つまり、ELTCが提供する留学生との交流の場は、グローバル社会を生きる学生・生徒に、英語を生きたコミュニケーションのツールとして使わせ、同世代の異なる国や文化の人々と交流させていることから、内容においても十分な妥当性と実効性を伴っているといえる。

ELTCには日常的に異なる国や文化の人々が数多く出入りし、それらの人々と学生・生徒が自然に英語でコミュニケーションできる環境がある。そのような環境をさらに充実させていきたいと考えている。そのことが、学生・生徒を国際共通語としての英語に興味を持たせ、英語学習意欲を喚起し、英語力の向上に寄与すると同時に、国際交流を推進する学校としての樟蔭のイメージを高め、学園全体の宣伝効果に繋がると信じる。

[注]

- (1) 外国語能力の向上に関する検討会「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」文部科学省 2011年
- (2) 加藤幸次・浅沼 茂「国際理解教育をめざした総合学習」黎明書房 1999年